

二〇一七年度

帰国生入学試験

## 【基礎学力検査】

### 「国語」問題

1. 問題および解答用紙は試験開始の合図があるまで開かないでください。
2. 解答はすべて解答用紙の所定の欄に記入してください。
3. 受験番号および氏名は解答用紙の所定の欄に記入してください。
4. 試験終了後、解答用紙を問題の上にふせて置いてください。
5. 回収するのは解答用紙だけです。問題は持ち帰ってください。
6. 「国語」の問題は1ページから6ページまでです。

1 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

1 「国民国家」という場合の「国民」とは、ドイツ人とかフランス人、イタリア人、ロシア人、ポーランド人……などの言語を中心とした文化的伝統を共有する共同体のことである。ヨーロッパでは、様々な言語や宗教、習慣を持った人々が一つの地域に居住したり、政治的境界線が変動することがしばしばあるので、「国民」の居住する地域の境界線と、統治のための組織としての「国家」の領域がなかなか一致しない。

2 近代以前には、一般の民衆は、自分の住んでいる土地をたまたまオサ<sup>(A)</sup>めている領主に従属するだけで、自分自身の文化的アイデンティティ（同一性）についてあまり意識していなかったが、一九世紀の初頭から中盤にかけて、ヨーロッパ各地の民衆の間に「国民」意識が急速に広まったとされている。きっかけは、フランス革命とナポレオン戦争である。

3 早くから中央集権国家を形成し、革命によって市民主体の国を作り、ナポレオンの下で強力な「国民」の軍隊を作り上げたフランスが、隣国に対して戦争を仕掛けて、勝利し、支配下に置くようになる。すると、それらの諸国の民衆の間に、自分たちはフランスとは別個の「国民」であるので、フランス人に支配されるいわれはない、という対抗意識が芽生えてくる。そうした他の「国民」に対する対抗意識が、ヨーロッパにおける「ナショナリズム nationalism」の起源だとされている。ナショナル意識を持った人々は、「国民」ごとに一つのまとまった、独立の「国家」を持ち、外敵を排除しようとするようになる。

4 例えば、ドイツ語を話す人々の間では、自分たちは一つの「国民」であるという意識はナポレオン戦争以前からある程度形成されていたとされているが、一九世紀初頭までのドイツは数十の領邦国家に分かれていて、民衆の間の政治的な連帯は希薄であった。それがナポレオンとの戦争で、プロイセンやオーストリアなどドイツ諸国の連合軍が敗れ、フランスの支配下に入ったのがきっかけで、「国民」としての連帯と、統一国家が必要であるという意識が一気に広まることになる。ドイツ観念論の創始者である哲学者のフィヒテ（一七六二―一八一四）は、フランスの占領下にあったプロイセンの首都ベルリンで『ドイツ国民に告ぐ』（一八〇七―〇八）という有名な講演を行い、フランスに対抗するためには、ドイツ諸邦で、ドイツ語・ドイツ文化教育を強化し、国民意識を高揚させていく必要があることを強調した。

5 一九世紀ヨーロッパ諸国の歴史は、「国民国家」生成をめぐる歴史だと言ってもカゴン<sup>(B)</sup>ではない。「国民国家」を形成するには、それまでばらばらになっていた「国民」のメンバーが一つの「国家」へと領土的、政治的にまとまっていくと共に、その「国家」から異

分子（＝他国民・他民族）をできるだけ排除することによって、同質性と求心力を高めることも必要になってくる。自分たちの身近にいる「誰か」を自分たちとは「違うもの」として仲間外れにしないと、自分たちの「アイデンティティ」をはっきりと確認しにくいということがある。<sup>3)</sup>「彼ら＝敵」との対比で、「我々＝仲間」の共通性が見えてくるのである。ドイツの場合、ドイツ人の居住する地域を全部一つにまとめようとすると、どうしても、ポーランド人やチェコ人など、ドイツ人以外の人たちが含まれてくる。「ドイツ人ではないものたち」をどうするか、という問題が不可避的に生まれてくる。有名な「大ドイツ主義 対 小ドイツ主義」の対立は、この問題をめぐるものである。

6 「こうした「他者」排除による仲間意識の確認というのも、社会の様々なレベルで観察される普遍的な現象であろう。ありがちの話をすると、自分たちは都会的なセンレン<sup>①</sup>されたセンスの持ち主だと確認したい人たちが、身近にいるグサイ感じの人を田舎者扱いするとか、特定の趣味を共有するオタク集団が、自分たちにとっての最低限のオタク知識を持っていない者を仲間と認めないとか、ということが考えられる。自分たちの「標準」からずれているものを具体的に名指しすると、それとの違いで、自分たちの「標準」を事後的に確認しやすくなる。こういう排除を通しての「我々」のアイデンティティの確認というのは、自分たちの立場に自信がない人ほど、はまりやすい。

7 「こうした「敵」と「仲間」の相関関係の発展のメカニズムを、哲学的・抽象的にまとめると、以下のようなになるだろう。強い「敵＝彼ら」との遭遇で生まれた「仲間＝我々」意識は、いったん一つの形にまとまると、より強力で安定した「仲間」関係を構築し、それを各構成員のアイデンティティ（帰属意識）の基盤とすることを目指すようになる。そうした「仲間」の自己組織化運動は、ある程度進行すると、今度は自分たちの近くに、あるいは自分たちの内に、新たな「敵」を見出して、それを排除することで、「仲間」の同一性を確認し、自己を純化しようとするようになる。

8 「敵」と共に始まった「仲間」意識は、自己を維持するために、常に「敵」を必要とするのである。

（仲正昌樹『今こそアーレントを読み直す』より  
作問のため内容を一部改変した）

問1 —— 線部(A)～(C)のカタカナを漢字に改めなさい。

問2 1、2段落の内容を次のようにまとめました。空欄に当てはまる語句を、本文中からそれぞれ抜き出しなさい。

ヨーロッパでは、様々な言語・宗教・習慣をもった人々が同じ地域に住んでいた。しかし、近代になると人々は I を核とした文化的アイデンティティを意識する。II に変貌した<sup>へんまう</sup>のである。

問3 ——線部(1)「フランスが、隣国に対して戦争を仕掛けて、勝利し、支配下に置くようになる」とありますが、このことは周辺諸国の民衆にどのような影響を及ぼしましたか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア フランス国民との違いを意識し、対抗心を持つようになった。
- イ ナシヨナリズムに対する違和感を抱くようになった。
- ウ フランスと同様の市民革命を目指すようになった。
- エ 国家間の政治的連帯を望むようになった。

問4 ——線部(2)「国民国家」が形成されるためには、どのようなことが必要ですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 他国民に支配される経験
- イ 国民としての連帯と外敵の排除
- ウ 領邦国家の統一と周辺国に対する戦勝
- エ 言語・文化に対する同一性の認識と求心力の育成

問5 ——線部(3)「彼ら⇨敵」との対比で、「我々⇨仲間」の共通性が見えてくる」とありますが、これを説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 国家の領土的、政治的な同一性は、国民の文化的同一性によってつくられる。
- イ 仲間意識というものは、異分子を排除し自分たちの標準を確認することによってつくられる。
- ウ 他国民を排除しようとすることは、自国民と他国民との優劣を際立たせることと同じ意味を持つ。
- エ 国民国家としてまとまっていくなかに、どうしても周辺の他の国民を含めていくことになる。

問6 7、8段落の内容を次のようにまとめました。空欄に当てはまる語句を【語群】よりそれぞれ選び、記号で答えなさい。

国民国家が形成される過程に明らかかなように、人々の仲間意識とははじめから明らかかなものではなく、外敵を排除することによって I 的に見出されるものだ。しかし、いったん仲間意識が形成されると、人々はより確かな結束の基盤を II するようになっていく。そしてやがては、仲間の内側にも III に敵を見出し、それを排除することによって自分たちのアイデンティティを維持しようとするのである。

【語群】

- I ア 革命    イ 攻撃    ウ 結果    エ 計画
- II ア 保護    イ 分析    ウ 受容    エ 希求
- III ア 慎重    イ 創造的    ウ 強引    エ 理性的

問7 本文の内容に合致しないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 国民国家というものは、近代ヨーロッパにその起源を持つ。
- イ そもそも国民という意識は、他の国民に対する優越感から生じた。
- ウ 国民国家を形成するのに、人々に共通する文化的伝統を意識させるだけでは不十分である。
- エ 仲間意識というものは、自分たちとは異質な他者を排除することによって見えてくる。

## 2

次の文章を①～③の条件にしたがって、八十字以上百字以内で要約しなさい。

- ① 三文で要約すること  
 ② 第二文の書き出しを「しかし」、第三文の書き出しを「つまり」で始めること  
 (……………。しかし……………。つまり……………)。  
 ③ 解答欄の一マス目から書き始め、句読点も一字に数えること

一般的に、態度がめまぐるしく変わる人は、確固たる自己がないように見えるものである。たとえば友人関係において、Aのグループに対して見せる態度と、BやCのグループに対して見せる態度がころころと変わるようだと、その人は「八方美人」だとか「他人の顔色をうかがう人」だと否定的に捉えられることになる。だが、誰だって態度が常に一貫しているわけではない。相手が強硬な姿勢で接してきたばかりに、普段より態度が委縮してしまうことだってあるし、逆にそれに負けないようにと普段よりも虚勢を張ってしまうこともある。他にも、誰かに好意を抱いたことで、いつもより態度がよそよそしくなったり、妙に張り切った態度になったりすることもあるだろう。

それでは、態度がめまぐるしく変わること、自己がないように見えるのは、どのような時だろうか。それは、その態度をとることが傍<sup>そば</sup>から見ていると妥当だとは思えないケースである。同じ例で考えてみよう。誰かに強硬な姿勢で責め立てられている人がいるとする。その人が、すっかり委縮してしまっているのを見た時に、「たとえあんな風に責め立てられたとしても、そこまで卑屈な態度を取ることはない」と思えるような状況であれば、その人の態度変化には違和感を覚えるだろう。一方で、「あんな風に責め立てられてしまったら委縮するのも無理はない」と共感できれば、その人の態度には何ら違和感がな<sup>い</sup>い。このように、その人がおかれた状況の理解が他者と共有されれば、態度の変化は許容されるのである。

人がそのときどきの状況において見せる態度というのは、ある種の自己演出である。自分を強く見せようとするのも、卑屈な態度を示すのも、すべて「相手も周囲の人も含んだあらゆる他者に対して自分をどのように見せるのか」という演出なのである。そこでは「自分が他者の目にどのように映るのか」といったことが、意識的であっても無意識的であっても考慮される。この演出は、当人の状況判断だけですべて決まるわけではない。人は他者との共同作業によって自己演出を成立させていると言えるのである。

(本文は本校で作成した)



